

Research on the process by which parents of children with schizophrenia associate with their experience : From onset to continuing life in community

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2018-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00051281

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平成 30年 2月 20日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 1529022004

氏 名 川口 めぐみ

論文審査員

主 査（職名） 塚崎 恵子（教授）  印

副 査（職名） 大桑 麻由美（教授）  印

副 査（職名） 北岡 和代（教授）  印

論文題名 Research on the process by which parents of children with schizophrenia
associate with their experience: From onset to continuing life in community

論文審査結果

【論文内容の要旨】

子が統合失調症の発症から地域での生活を継続していくまでに、その親はそれらの経験とどう付き合っていたか、そのプロセスを明らかにした。統合失調症の子をもつ親 14 名を対象として、半構造化面接を実施した。木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した結果、2 つのカテゴリー、13 の概念を抽出した。子の発症当時の親は、子の症状を「幻覚・妄想と捉えず生活を継続」していた。子が診断を受けることで親は精神疾患への衝撃を受け、【親としての自立への期待】のプロセスに入っていた。この衝撃には、親自身の偏見が影響していた。子の「完治を信じる」親は、子の回復が見られると「同世代と足並みを揃えるために手を尽くす」ことを行い、また子が再発を経験すると「叱咤激励する」ことを行っていた。この回復と再発を幾度も経験することで親は「幻覚・妄想への対応に迷走」していた。しかし、「家族会から安心を得る」ことをコアの概念として、「子を尊重する」ことや「自分の人生を楽しむ」ことができるようになり、【回復の限界の認識】のプロセスに入っていた。親は、「統合失調症の子を受容する」ことで「子のできる範囲の生活を受け入れる」ことができ、子の地域での生活継続に至っていた。「統合失調症の子を受容する」と「子のできる範囲の生活を受け入れる」ことには、「完治を諦める」ことが影響していた。その一方で、年齢を重ねるにつれ、子の「親亡き将来の準備をする」ことに力を注ぐようになり、子の「自立への捨てきれない望みを抱く」思いが沸き上がり、「子のできる範囲の生活を受け入れる」という現実とその望みとの間で、心の葛藤を生んでいた。

【審査結果の要旨】

統合失調症者の地域での生活移行が進む中、症状の再発を予防しながら地域生活を継続するためには、生活を共にする親への看護支援が重要となる。本研究において親の経験や心情が明らかにされ、効果的な看護支援を提言することができ、学術的に意義ありと評価できる。また、本研究による新たな知見は、今後その活用が期待できる。公開審査では、いずれの質問にも適切な対応がなされた。以上、学位請求者は本論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。